

# ニコライ・ハールジエフ、ワルワラ・ブブノワ 未発表往復書簡について

太 田 丈太郎

## 1.

このところロシアはワルワラ・ブブノワ（1886-1983）の小ブームである。2017年9-10月にモスクワ・アルバート街にある「アンドレイ・ベールイの家博物館」でブブノワの小展覧会が催されたほか、2018年8-9月にはヴォローネシ州クラムスコイ記念美術館で、アレクサンドル・ロゾヴォーイ氏のコレクションからなる小展覧会が開かれた。さらに2018年には11月末から翌年1月まで、モスクワの「シャージナ画廊」で小展覧会が開催された。ベールイの家博物館での展覧会初日と、ヴォローネシでの展覧会閉会日には私も同席し、日本時代のブブノワの業績をめぐって未刊行アーカイヴ調査にもとづく講演をおこなった。

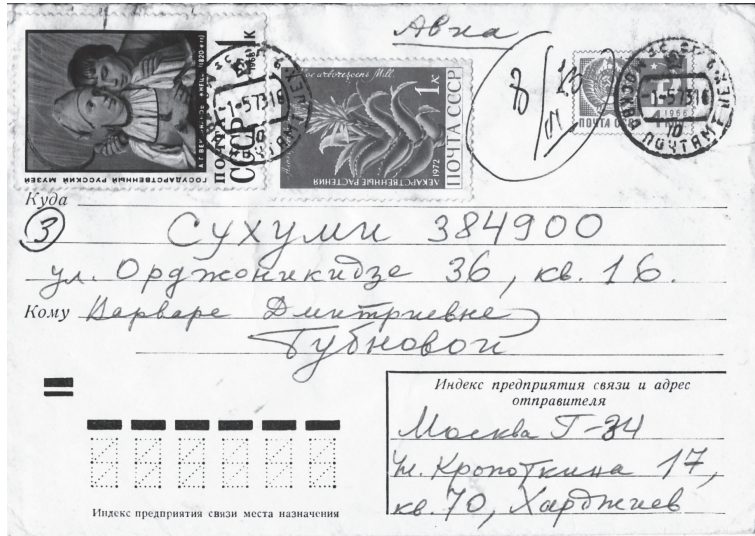
2015年の秋以来、私はイリーナ・コジェーヴニコワ（1925-2011）の遺した文書の整理と意味づけに追われている。コジェーヴニコワはもっぱらブブノワの伝記の著者として知られているが、その文書をあらっていると、想像をはるかに超えるほど幅広い活動、交友範囲と生きざまがうかがわれ、適当なコトバを探すのに苦勞する。2017年9月にモスクワからその文書をすべて回収してきた。引き取り手もなくいたずらに朽ちていただけの書類である。それをもとに、私はすでに三点の記事を発表した<sup>1)</sup>。

文書のなかにロシア・アヴァンギャルド芸術研究の第一人者であるニコライ・ハールジエフ（1903-1996）のブブノワ宛書簡原本（しめて四点）がまぎれているのに気づいたのは、ちょうど米川正夫の書簡を発見したときと同じ2015年秋のことだった。コジェーヴニコワは晩年ブブノワの遺した文書やスケッチブックなどをロシア国立文学・芸術文書館（РГАЛИ）に引き取ってもらえるよう尽力したが、すべてが引き取られたわけではなかった。文書館が受け取らなかった（またはコジェーヴニコワが渡さなかった）書類のなかに、ハールジエフのブブノワ宛書簡原本が見つかったのであ

---

1) 太田丈太郎「米川正夫のブブノワ宛書簡」『異郷に生きる VI 来日ロシア人の足跡』成文社、2016年、243-254頁；太田丈太郎「イリーナ・コジェーヴニコワのアーカイヴについて」『海外事情研究』第45巻（熊本学園大学付属海外事情研究所、2018年3月）、25-46頁；太田丈太郎「モスクワで発見されたブブノワ肉筆書簡について」『ロシア語ロシア文学研究』第50号（日本ロシア文学会、2018年）、127-148頁。

る。とはいえ、肝心のブブノワによるハールジェフ宛返信がどこにあるのか、見当もつかなかった。



1973年4月30日付け（投函日は5月1日）、ハールジェフのブブノワ宛書簡の封筒。ブブノワの字で同年6月8日に返信したことがメモされている

ハールジェフは生涯、個人的な付き合いのあったカジミール・マレーヴィチやミハイル・マチューシン、ヴラジーミル・マヤコフスキー、ピョートル・ミトゥーリチ、エル・リシツキーなどロシア・アヴァンギャルドのアーティストたちの作品や原稿、書簡類を保管・収集、それをもとに研究を続けてきたのだが、不遇のため晩年はオランダのアムステルダムへ移住（1993年）し、それにともないかれの貴重きわまりないアーカイヴも、モスクワとアムステルダムで二分されることになった。文書の国外持ち出しをめぐる大きなスキャンダルが持ち上がったが、それについては詳述しない<sup>2)</sup>。

2011年にモスクワのロシア国立文学・芸術文書館とアムステルダム市立美術館のあいだで交渉が成立し、ハールジェフのアーカイヴ原本はすべてモスクワに一本化されることになった。アムステルダム市立美術館は原本を写したマイクロフィルムやPDF文書を所有している。2017年末にロシア国立文学・芸術文書館はハールジェフのアーカイヴを出版物として刊行しはじめたが、アーカイヴそのもの（Ф.3145）は、ハールジェフ自身の遺志により2019年11月まで公開されない。2017年10月11日

2) *Сарабянов Андрей*. Н.И. Харджиев – собиратель и исследователь русского авангарда // Архив Н.И. Харджиева. Русский авангард: материалы и документы из собрания РГАЛИ. Т.1. М., 2017. С.13-28;  
*Горьева Татьяна*. Как архив Н.И. Харджиева был возвращен в Россию // Там же. С.31-41.

から2018年1月30日まで、ハールジェフが所有していたアヴァンギャルド芸術家たちの手稿やスケッチ、作品類をめぐる非常に重要な展覧会が、モスクワの主催者《IN ARTIBUS》基金の建物で開催された。

2018年5月、サンフランシスコに在住するロシア・アヴァンギャルド芸術の研究者アンドレイ・ウスチーノフ氏から私に連絡があり、ウスチーノフ氏がアムステルダム市立美術館で得てきたハールジェフのPDF文書のうち、ブブノワのハールジェフ宛返信（しめて三点）を見せていただいた。現在、ハールジェフ・ブブノワの往復書簡を意味づけ、しかるべくおおよげにできるよう、ウスチーノフ氏と話し合いを始めたところだ。

本稿では、これまで未発表のハールジェフ・ブブノワ往復書簡を紹介する。作業はまだ最終的に完了していない。この往復書簡を場所と時代に即して生かし、意味づけるための一道程、最初の一步にすぎない。注も完備されておらず未完成ではあるが、ハールジェフのアーカイヴが公開される前に発表することに本稿の意味があるため、不明な箇所も多いまま、あえてここに紹介することにした。

以下、二人の往復書簡はもとより、コジェーヴニコワとブブノワの往復書簡を援用しながら、遺された手紙を時代と場所のネットワークに浮かべてみよう。かぎられたスペースにできるだけ多くの情報を盛り込みたいため、ハールジェフ・ブブノワ往復書簡からの引用は地の文とおなじ体裁で、つまり字下げ改行はしない。書面の改行は原本にもとづく。引用が長く、読みづらくなるかもしれないが、貴重な書簡であるため、ほぼ全文を訳出する（省略箇所は〈…〉で示す）。以下、日本語訳ならびに傍点は、すべて私による。

## 2.

なぜハールジェフがブブノワに手紙を書いたのか。最初の手紙の日付は1973年4月17日。それによると、1920年代末にオデッサからモスクワへ移って以来、ロシア・アヴァンギャルド芸術の成立と生成について、リアルタイムとは言えないまでも、それぞれの分野の最前線でまだ活躍していた芸術家たちに直接由来する証言を集め、かれらのアーカイヴをもとに研究を続けてきたハールジェフが、ブブノワに対していわば書面による「聞き書き」を立ちあげようとしていたことがうかがえる<sup>3)</sup>。

---

3) 1931年6月19日、アンナ・アフマトワ宅を訪ねた鳴海完造が若き日のハールジェフを見かけている。「色の浅黒い丸顔の一寸肥ったガッシリした южный тип [南方系] の男」と鳴海は日記に書き込んだ。鳴海はアフマトワから直接アクメイズムの成立と生成をめぐって「聞き書き」を残したが、鳴海が見かけたハールジェフは、アフマトワとなにを話していたのだろうか。太田丈太郎『ロシア・モダニズムを生きた 日本とロシア、コトバとひとのネットワーク』成文社、

ブブノワは来日（1922年）する以前（1910年代前半）、サンクト・ペテルブルクの前衛芸術家集団「青年同盟」に所属していた。このグループは当初、1909年末にマチューシンとエレナ・グローのイニシアティブで生じたが、二人はまもなく脱会した。翌1910年2月に規約が成立し、ヨシフ・シコーリニク、サヴェーリー・シレイフェル、エドゥアルド・スパーンジコフなどがグループに名を連ね、レーフキー・ジェヴェルジェエフ（1881-1942）が議長に選ばれた。3月に最初の展覧会が開催された。メンバーの作品のほか、ナターリヤ・ゴンチャローワ、ミハイル・ラリオーフ、イリヤ・マシコフ、アレクサンドラ・エクステル、クジマ・ペトロフ＝ヴォートキン、パーヴェル・フィローノフ、ブルリュク兄弟らの作品が展示された。展覧会「青年同盟」は1913年までに五回開催された<sup>4)</sup>。

ジェヴェルジェエフはペテルブルクの目抜き通り、ネフスキー大通りにある百貨店「ガスチーヌイ・ドヴォール」にも店を構える、教会で使用される錦やその他用具の工場主の息子で、舞台芸術に関わるスケッチやコスチューム、書籍のコレクションで知られ、それが革命後、今日のサンクト・ペテルブルク国立舞台・音楽芸術博物館所蔵コレクションの土台となった。ジェヴェルジェエフは「青年同盟」の運営ばかりでなく、未来派のドラマ『悲劇ヴラジーミル・マヤコフスキー』やオペラ『太陽の征服』の上演にあたって金銭面を援助したパトロンとしても知られる。その娘タマーラは、革命後のペトログラードで偉大なキャリアをはじめたばかりのバレエ・ダンサー、ジョージ・バランシンと知り合い、かれの最初の妻（タマーラ・ジェーワの名前で知られる）になった。

グループ名と同じ名前の雑誌も発行され、1912年4月に出た第一号にヴラジーミル・マールコフ「新芸術の諸原理」第一部が掲載された。ヴォルデマール・マートヴェイ（1877-1914）の筆名である。リガ生まれのラトビア人でブブノワの最初の夫になった人物だ。かれは事実上グループを理念的にも実際面でも主宰した。アヴァンギャルド芸術とは無縁に感じていたブブノワも、サンクト・ペテルブルク美術アカデミーで先輩だったマートヴェイの感化で二〇世紀芸術に関わるようになった。第一号にはブブノワも、「Д. ワルワーロワ」の筆名で寄稿（「ペルシアの芸術」）した。その仲間にはパーヴェル・フィローノフやオリガ・ローザノワもいた。それから六〇年を経てロシア・アヴァンギャルド芸術、なかでも「青年同盟」の当事者としての直接的な証言を求めて、ブブノワにハールジェフが近づいてきたのだった。「青年同盟」に所属していた仲間たちやかれらのその後の消息について、ブブノワもハールジェフ

2014年、302頁、313-317頁。

4) Турчин В.С. Л.И. Жевержеев и художники «Союза молодежи» // Волдемар Матвей и «Союз молодежи». М., 2005. С.225-239.

に手紙で質問した。

① 1973年4月17日、ハールジェフのブブノワ宛書簡

「敬愛するワルワーラ・ドミートリエヴナ！わたしは《青年同盟》と、1907年から17年までの芸術集団の生成史<sup>5)</sup>を書いたニコライ・ハールジェフです。あなたのことは昔、わたしたちの共通の友人ニコライ・プーニンからたくさんうかがいました。たったいまあなたのことをイリーナ・コジェーヴニコワさんがよくご存じであると知りました、コジェーヴニコワさんと仕事の用事で会ったのです。あなたとおつきあいを始めることができれば幸甚です。」

一週間後、受け取ってほとんど即座にブブノワは返事をしたためた。ハールジェフの手紙から若き日の「修業時代」が思い起こされたのだろうか、モスクワからスフミまで手紙の届く日数にかんがみても、ひじょうに素早い応答を見せている。

② 1973年4月24日、ブブノワのハールジェフ宛書簡

「尊敬するニコライ・イワーノヴィチ！

「あなたの短いお手紙はわたしにほんとうの喜びをもたらしました。1907-17年はわたしの青春の日々であり、いちばん懸命に絵を学んだ時期にあたります。なぜならちょうど1907年から14年まで、わたしは美術アカデミーで学んでいたからです。この時期をご研究するにあたっては、あなたもヴラジーミル・イワーノヴィチ・マートヴェイという人物と、造形芸術全般の生命と生成史をめぐるかれの書きものに出くわさないわけにはいかなかったらうと思われます。ヴラジーミル・マールコフという筆名で出ておりました。たぶん、どこかでニコライ・プーニンから聞いてあなたもご存じだらうと思います。プーニンをめぐっては、わたしにはそれこそ光あふれる思い出と、このうえなくかなしい思いが残っています。」

### 3.

ニコライ・プーニン（1888-1953）は詩人アンナ・アフマートワの夫だった芸術学者である。1927年5-7月、朝日新聞社の主催で東京・大阪・名古屋でソビエト現代芸術家の作品を一堂に集めた「新ロシヤ展」が開催された折り、展覧会のソ連側総責任者として来日した。展覧会開催にあたって、ブブノワはプーニンの手伝いをするこ

---

5) 原文は *история* だが、「歴史」では意味が伝わらないため、以下「生成史」と訳出した。

とになった。気むずかしいと聞いていたプーニンであったが、ペテルブルクの芸術家に共通の知り合いも多く、なによりプーニンはブブノワの最初の夫マートヴェイをよく覚えていた。折を見てブブノワは、日本で結婚した夫ヴラジーミル・ゴロフシコーフと一緒に、プーニンを日本の観光名所に案内するのだった。展覧会終了後の7月12日、プーニンは彼らの自宅に招かれ、ささやかながら結婚（ソ連全権代表部での結婚登録）を祝う宴席にも加わった。1927年、プーニンの帰国後に書かれたブブノワの手紙（書かれた場所が「ヨガワ」とあるが湯河原のことか？）が公刊されている。

「親愛なるニコライ・ニコラーエヴィチ！

熱海から、海と岩、温泉からあいさつを送ります。熱海へは歩いて行ってきました。私たちは山の、あなたもご存じのようなホテルにいます。一日中あなたのことを、あなたとした散歩や、あなたが広々としたところや暖かい気候に喜んでしたことなど、思い出していました。わたしたちのこと覚えていらっしゃるでしょうか？何事もなく暮らしています。あなたはいかが？あなたとアンナ・アンドレーエヴナ [アフマートワ] にご挨拶を送ります。〈・・・〉<sup>6)</sup>

ブブノワはプーニンの娘イリーナ（当時六歳）にも絵はがきを送った。「かわいらしいイリーナちゃんに、お山と雲に囲まれた高いところの湖で、お舟に乗ってお便りします。B [ワルワーラ] おばちゃんより」「青い水。白い雲。お舟を漕ぐ音。冷たいお水。緑の木々の間に赤いお花が咲いています。お父様の楽しそうなお顔。青い海、高いお山、いくつもの湖、谷、お花、それが日本です。B [ゴロフシコーフ]。箱根」<sup>7)</sup>

それから四〇年もの歳月を経て、1966年9月、ブブノワはエヴゲーニー・コフトゥーン（レニングラードのロシア美術館版画部学術研究員）に宛てて、プーニンと過ごした日本の日々を回想している。長くなるが、ブブノワとプーニンのこまやかな交流が丁寧にえがき込まれている書面なので、ここに引用する。

「プーニンが展覧会と一緒にやってくると知って、郷愁と孤独感にさいなまれていたものですから、かれと近づきになることにしました。東京はまだ1923年の大地震と火事からすっかり立ち直ってはいませんでした、〈・・・〉かれには《ソビエト市

6) *Кожевникова И.П.* (составитель) Уроки постижения. Художник Варвара Бубнова. Воспоминания, статьи, письма. М., 1994. С.246.

7) Там же. С.247.

民》（日本には亡命ロシア人がたくさんいたのです）で画家だと紹介されたことを覚えています。なにかしらすぐ、気持ちの良いつながりがかれとのあいだにできたものですから、わたしはヴラジーミル・イワーノヴィチ [マートヴェイ] の話をしました、わたしの人生をひっくり返してしまった（そう表現したことを覚えています）かれの死のことを話したのです。当時プーニンがマートヴェイの仕事を知っていたかは存じません。（・・・）



「新ロシア展」会場（東京か？）と観衆。左の壁にペトロフ＝ヴォートキン（『アンナ・アフマトワの肖像』が見える）とダヴィード・シテレンベルクの作品、正面にエレナ・ペーブトワの作品が見える。（C）Наследники Н. Н. Пунина, 2018.<sup>8)</sup>

「展覧会の開会も、展覧会そのもののことも、展覧会を日本の観衆がどう迎えたかもおぼえておりません。とはいえ、プーニンとわたしたちはすっかり仲良くなりました。わたしがあまり絵画の仕事をしていないとって、プーニンはわたしを責めました。二つの大学で講師になったばかり [1924年より早稲田大学、27年から東京外国語大学でも] で、ロシア文学の勉強をたくさんしなければならなかったのです。絵画というよりは、日本の工芸学校で習ったりトグラフで抽象的なものを制作して展示していましたけれど、プーニンはたいして褒めてはくれませんでした。「7月12日、プーニンがわたしの小さな日本家屋で催された結婚の宴席に来てくれました、夫と領事館で結婚の登録をしましたので、それで宴席を設けたのです。宴席は家に釣り合ったつましいものでした。イワシの缶詰とレモネードがメインな

8) プーニンのひ孫、遺産相続人ニコライ・ズイコフ氏所蔵の写真。掲載許諾あり（2018年11月29日付け、太田宛の私信）。

のです。プーニンがイワシの缶詰を好むことがわかりました、ソ連にまだなかったのです。夕方、わたしたちはプーニンと二階のベランダに座っておりました、ちっぼけな庭にのぞむベランダがあったのです。プーニンはとてもやわらかな夢見がちの気分にはたっていました。7月の夜は痛いくらいにものやわらかで、夢想へいざなうかのようでした。〈・・・〉唯一奇跡のようにわたしの手元に残ったカードをお送りします。プーニンはおいしそうに日本茶を飲んでいきます。キモノを着て、温泉につかったあとのようです（熱海で）。わたしはかれとふざけています、もっとも、写真は夫が撮ったのですが。〈・・・〉<sup>9)</sup>

ブブノワがハールジェフに伝えている、プーニンをめぐる「光あふれる思い出と、このうえなくかなしい思い」というのは、のちにプーニンが逮捕され（1938年と49年の二度）、獄死したことを指しているばかりでなく、日本での楽しい日々と一緒に過ごしたゴロフシコーフのことをしる言ったものと思われる。「二・二六事件」以降、敗戦にいたるまで、ブブノワ夫妻は「敵国人」として非常に辛い生活を強いられました。ともに苦難に耐えてきた夫ゴロフシコーフは、戦中のストレスが原因で、戦後まもなく急逝した。

他方、プーニンもまた1942年の冬、ナチスに包囲されたレニングラードで、娘のイリーナに「太陽のあふれる日本」の思い出を語ったという。日本の花、海、岩場、色鮮やかなキモノや風に揺れる提灯、東京の路上で鳴る風鈴—食糧もなく燃料もない、凍えるようなアパートでプーニンはこの世と別れるかのように、娘と孫娘アーニャ、イリーナの従兄弟イーゴリ・アレンスに日本の思い出を語ったという<sup>10)</sup>。

2018年6月15日から8月19日まで、プーニンの来日と「新ロシア展」をテーマにした展覧会がサント・ペテルブルク「アンナ・アフマートワの家博物館」で開催されたことを付記しておく。

#### 4.

ブブノワのハールジェフ宛書簡にもどらう。

9) Уроки постижения. С.340–341. 熱海で撮影されたブブノワとプーニンの写真は以下に掲載されている。コジェーヴニコワ『ブブノワさんというひと 日本に住んだロシア人画家』三浦みどり訳、群像社、1988年、182頁；*Кожевникова Ирина*. Варвара Бубнова. Русский художник в Японии и Абхазии. М., 2009. С.103.

10) Пунина И.Н. Из архива Николая Николаевича Пунина // Лица. Биографический альманах. Вып.1. М.; СПб., 1992. С.427.



「この5月で八十七歳になります。そのためわたしはほとんど出歩くことができません。ついこのあいだまでは展覧会や友人たちに会いにモスクワへ出かけるのも平気でしたが、いまはだめです、あなたと書面でしかおつきあいできないのをとてもかなしく思います。とはいえ、あなたからたくさんうかがいたいことがありますし、わたしもたくさんお話しできればと思います。むろん紙にすべてを託すことはとてもできませんけれど。

「筆跡から判断するに、あなたはまだそうお年も召しておらず、バランスのとれた方であるようです。もしソ連国内をご旅行なさるのでしたら、スフミまでいらっしゃいませんか？ 〈…〉

「書面であってもおつきあいを始めることは、あなたがロシア芸術潮流史研究のお仕事を続けられるのでしたら、わたしたち双方の役に立つかもしれません。わたしも続けたく思います、でもそれをこいねがうだけでは足りない。さてどうなることでしょうか。」

### ③ 1973年4月30日付け、ハールジェフのブブノワ宛書簡

「敬愛するワルワーラ・ドミートリエヴナ！

「あなたの手紙は都市を越え、山河を越えた友情の握手のようです。お手紙がわたしにどれだけの喜びをもたらしたかをここに書くまでもありません。あなたは輝かしい隊列 [koropra] の一員であったわけですが、そのメンバー（マレーヴィチ、タートリン、フィローノフ、ブルリューク、マチューシン、フォンヴィージン）とわたしは親しく交際する機会をもちました。ラリオノフとゴンチャロワも、とおくからわたしに好意的に接してくれ、いろいろな資料を送ってくれたものです。

「あなたの優れた直感力（うたがいもありません）にもかかわらず、勘違いをなさいましたね。わたしはもう年寄り（六十九歳）で、ぜんぜんバランスのとれた人間ではありません。カッとなりやすく（すぐに忘れませんが）、ほんとうの友人たちしかわたしの難しい性格を許容してくれません。

「残念ですが、スフミへ出かけることはできません。フレーブニコフの作品集出版（わたしの編集）の問題が協議中だからです。こういう問題はとかく長くかかるだけで、時間のカテゴリーをまったく無視しています。ですから書面というやりにくい対話方法に頼るほかないのです。

「わたしも高く評価しているヴラジーミル・マールコフを論文に書いたことがあります。かれは新芸術のいちばん感謝に値する、深遠な活動家の一人でした。

「あなたはもちろん、《青年同盟》第一集に掲載された小論の著者Ⅱ・ワルワーロワであることを否定なさらないでしょうね。たいへんすぐれた論文です、いまでも大いに興味深く読むことができます。

「《青年同盟》の生成史をわたしは初版の出版物やアーカイヴにたよって詳細に研究しました。むかしジェヴェルジェエフ（面白みのない人物です）や注目にあたいるマチューシンにも会ったことがあります。マチューシンの回想はわたしが筆記いたしました。

「というわけで、ワルワーラ・ドミートリエヴナ，《青年同盟》に所属していた無名の《二義的な》メンバーについてまずは知りたく思います。—バリエール，ボードゥアン・ド・クルトネ，ブイストレニン，ヴェルホーフスキー，ディーディシコ，エヴセーエフ，レールモントワ，マスタヴァーヤ（マトヴェーエフ），ナグーブニコフ，ポチパーカのことです。

「むろん，マールコフ，マルゴージン，エレナ・グロー，オリガ・ヴァザーノワ，ル・ダンチャーについて必要とお考えの情報がございましたら，お知らせいただけると幸甚です。

「もう一つだけ最後におうかがいたします。あなたは《ロバの尻尾》の展覧会に行ったことはありますか？《青年同盟》のメンバー（あなたも含めて）の作品もそこに展示されたのですが。」

ハールジエフの論文によると、「青年同盟」第一回の展覧会は1910年3月1日に開かれた。この展覧会にマートヴェイは，ラリオーフ，ゴンチャローワ，マシコフなどモスクワの前衛芸術家たちを招いた。きわめて煩雑なため詳細は省くが，「ロバの尻尾」のグループ名で，ラリオーフのグループは初めて「青年同盟」第三回の展覧会に参加した。1912年1月4日のことである。他方，同年の3月11日にモスクワで開催された「ロバの尻尾」の展覧会には「青年同盟」グループの作品も出展された。ローザノワ，フィローノフ，ナグーブニコフ，ディーディシコ，マールコフ（マートヴェイ），ブブノワ，ポチパーカ，シコーリニク，スパーンジコフ，リヴォーフなどの作品である<sup>11)</sup>。ブブノワへの書面でハールジエフが「ロバの尻尾」に言及しているのは，このときの展覧会を念頭に置いてのことだと思われる。

ハールジエフによる1910年前後のロシア・アヴァンギャルド芸術創生期の研究は，リアルタイムの出版物や個人的な文書に基づくきわめて価値の高いものではあるが，記述が詳細にすぎると，全体の展望がまったく見えないきらいがある。ペテルブルクとモスクワその他の都市で生じた各グループの傾向や方向性，理念の相違などについての分析がなく，いわゆる「学問的」な視座に欠けるうらみがある。おそらく，ハールジエフ自身はそのような「学問的」研究が可能になるのは次世代のことと考え

11) Харджиев Н.И. Статьи об авангарде в двух томах. Т.1. М., 1997. С.41.

ており、多少の読みづらさを無視しても、とにかくソ連の現実で忘れられようとしていたロシア・アヴァンギャルド芸術の遺産（なによりも自分の手元に保存されているアーカイヴ）を公表することを第一と考えていたのかもしれない。さらにハールジェフは、自分の嗜好を反映してか、ラリオーフをロシア・アヴァンギャルド運動の中心人物と見なし、かれの出国（1915年）後は運動全体の主導権をめぐって二人の「後継者（ディアドコイ）」ヴラジーミル・タートリンとマレーヴィチがあらそった<sup>12)</sup>、というような図式を描くけれども、それが芸術運動の実際にどれだけ合致していたのか、疑問が残る。「わたしのこの世で一番大好きな画家です、セザンヌ以後、このような画家は存在しません。偉大でありえないような画家、現在にいたるまで評価しきれていない例外的な存在です」—イリーナ・ヴルーベリ＝ゴループキナとのインタビューで、ハールジェフはラリオーフについてこう語っていた<sup>13)</sup>。

ハールジェフがジェヴェルジェエフを「面白味のない人物」とコメントしていることに注目したい。

前年夏のイタリアに引き続き、1912年7月から8月にかけて、マートヴェイは「青年同盟」に派遣されてドイツとフランスを訪問し、ジェヴェルジェエフが資金を出すことによりグループが計画していた「現代芸術博物館」のために資料を収集した。ドイツではフランツ・マルク、ワシーリー・カンディンスキー、ガブリエレ・ミュンター、ヘルヴァルト・ヴァルデン（画廊「デア・シュトゥルム」の持ち主）と会って、共同展覧会の開催や情報交換の可能性をめぐって、さらに将来の博物館用に作品の購入をめぐって交渉した。ドイツでは雑誌『青騎士』を購入した。パリではピカソの作品の写真を購入し、「青年同盟」の図書館用に書籍を渉猟した<sup>14)</sup>。

1913年の夏、マートヴェイは再度旅に出た。ブブノワとともにアフリカ黒人芸術探求のため、ヨーロッパ各地の博物館を訪問した。その成果は、膨大なアフリカ彫刻の写真とともに、かれの没後の1919年、『黒人芸術』という書名で出版された。それまでこのマートヴェイによる主著の原稿は、ジェヴェルジェエフの手元に眠ったままだった。革命がジェヴェルジェエフの現代芸術博物館をめぐるとの計画やその蔵書、美術コレクションの運命を根底から変えた。眠ったままだった『黒人芸術』の出版を主張した一人がマヤコフスキーであった。「同志ジェヴェルジェエフから寄せられている件ですが、私たちがよく知っていたのとおり、かれは最暗黒の反動期にも芸術分野

12) Там же. С.99.

13) Каталог выставки «Архив Харджиева». М., 2018. С.25. なお、2018年9月19日から2019年1月20日までトレチャコフ美術館で、1980年のロシア美術館での展覧会以来三十八年ぶりの大がかりなラリオーフ回顧展が開催された。

14) Лобославская Т.В. Хроника объединения «Союза молодежи» // Волдемар Матвей и «Союз молодежи». С.247.

で芸術の旗を高く掲げました。これらの調査〔マートヴェイの研究〕を出版することは私たちの義務です、アフリカ芸術のほかに例のない写真だけでもたいへんに興味深いわけですから、なおさら出版することが不可欠です」—1918年12月5日、「ナルコムプロス・イズ」（教育人民委員会・造形芸術部）の会議でマヤコフスキーはこう発言した。会議で議長を務めたのはプーニンである<sup>15)</sup>。

ロシア・アヴァンギャルド芸術が全ヨーロッパ的な芸術潮流と共振しつつ、世界的なコンテクストに置くことのできた重大なモメントに、マートヴェイもブブノワも身を置いていた。それを資金面で後押ししたのが、ほかならぬジェヴェルジェエフであった。ハールジェフはブブノワへの手紙でジェヴェルジェエフを「面白みのない」「たまたまそこにいただけ」の二義的な人物と評しているけれども、おそらくジェヴェルジェエフの活動の本格的な再評価も、ロシア・アヴァンギャルド芸術研究において、これからさらに取り組むべき課題として残るのではないだろうか。

## 5.

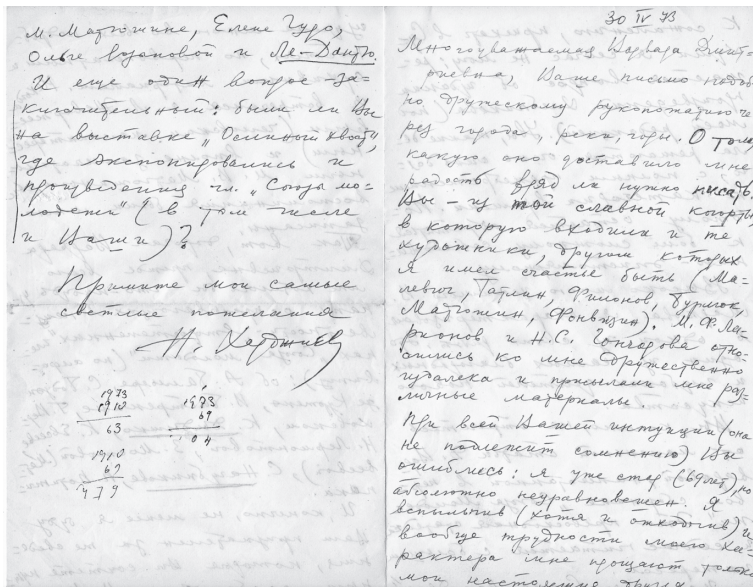
ブブノワがハールジェフの「青年同盟」をめぐる論文を読んだのかは不明だが、ハールジェフの著作に見られる研究者としての「文書的」「議事録的」な細かさが、ブブノワには好ましく感じられなかったように見受けられる。あるいは、ごく内輪の人間以外との付き合いを極力避けていたハールジェフの評判をどこかで耳にしたのだろうか。結局ブブノワは、ハールジェフからの問い合わせを芸術創造の実際からほど遠い「好事家」の偏愛、「芸術学者」の気まぐれ程度としか受け取らなかったように見える。

ハールジェフの仕事を公平に見るためにはブブノワはハールジェフを知らなすぎたし、またハールジェフの質問してくる時代や人々のことがブブノワにとってあまりにも切実だったからだろう。ブブノワのハールジェフに対する疑念、用心深さが徐々にあらわになってくる。文面が妙に入り組み、迂遠的な表現（以下、逐語的に訳す）を取るようになる。ときにユーモアをまじえながらも、老齡特有の繰り返しとまわりくどさだけでは説明できない、複雑な思いがブブノワの書面ににじみでていることに留意したい。

先の4月30日付けハールジェフからの手紙の末尾にブブノワがなにやら計算式を書き込んでいる（写真を参照）。当時の西暦1973年に「青年同盟」が結成されたときの1910年を引いて六十三年、1973年にハールジェフが書面で述べていた年齢六十九

15) *Маяковский В.В. Полн. Собр. Соч. в 13 томах. Т.12. М., 1959. С.226.*

歳を引いてハールジエフの誕生日 1904 年 (実際には 1903 年) を導き出している。これがなにを意味しているのかは、次の手紙で明らかになる。ブブノワは、「青年同盟」の発足時にハールジエフが何歳であったかを計算していた様子だ。1910 年に六十九年を足した痕跡もあるから、結成時にハールジエフが生まれたのではないかとも考えたい。



④ 1973 年 6 月 8 日付け、ブブノワのハールジエフ宛書簡

「敬愛するニコライ・イワーノヴィチ！お返事が遅くなりまして、ごめんなさい。  
 「わたしたちの手紙のやりとりは、いちばん簡単には喜びと名付けるべきものをもたらしてくれます。べつにあなたがあんまり年をとって性格が悪いからではなく、あなたがわたしのころにとって大切な歳月と大切な人々のことに触ってくるからです。こうしたこと全部にあなたが近いのは〔現実のひとや実生活ではなく〕当時生じた芸術に近いからで、その芸術を、言うなれば《生活》は絞め殺してしまったのです。むろん、あなたが友人として書いていらっしゃるひとたちは、わたしによりは、あなたのほうに近しかったでしょうけれども、この時代があなたに近づいてくるのは《資料にたよって》でしかない。《青年同盟》の頃、わたしは若くて臆病で、こうした新しい芸術家たちの世界に触れたのもマールコフ (マートヴェイ) を介してのことでした、マールコフ同様わたしもドゥバフスコイ先生の風景画アトリエで美術アカデミーを卒業したのです。ときたまわたしも新しい形式と色彩を試してはみましたが、それも《青年同盟》や《ロバの尻尾》の展覧会で。わたしはマールコフのアドバイスや懇請にしたがってそれに参加しただけでした。マールコフのこと、かれの考えや仕事について、あなたにお伝えできればと思います。でもあんまり長くなるもので

すから、とても大事なことであるとは重々承知しているのですけれども。

「それでも、わたしはあの当時、『登場人物』の一人だったのです、あなたは四歳〔七歳の誤り〕でしたか？ごらんなさい、わたしの直感力はわたしを欺きませんでしたね。したがって、わたしから見れば、あなたはまだまだお若いのですよ！あなたの言われる『輝かしい隊列』に属していた何人かのひとたちへのあなたの興味を、わたしは満たしてあげることができないように思います。先日、八十七歳になりました。ちかごろは、よく言われるように記憶もうすれてきましたが、それでもいまだあのとき通り過ぎていった人々ばかりでなく、そのひとたちの名前も愛情とともに思い出します。その他、たくさんの人々のことを。でも1921年にみんな『踏みつけにされて』しまって〔ネップのことか？〕、今頃になってから、さしずめ過去のなかの光のように思い出されはじめています。あなたは『青年同盟』についてのご本〔ハールジェフに『青年同盟』を単独で論じた著作はない〕をいつお書きになったのですか？現在、あの輝かしい過去が継承されているのでしょうか？1958年、祖国に戻りましてから、モスクワにわたしは何も見いだせませんでした。近年はじぶんの年齢を身体におぼえるようになりまして、モスクワやペテルブルクへ出かけるのもたいへんです、ペテルブルクにわたしが生まれたのも大昔になってしまった！」

「わたしがたまたま頻繁に出会うことになったひとたち（美術アカデミーで）のことをあなたに申し上げ、二三コメントしようと思います。」

「ジュヴェルジェーエフについて、とても重苦しい思い出があります。1914年、中国詩を翻訳したマールコフ（わたしたちの本『中国の葦笛』を見ましたか？）ばかりでなく、べつの詩人エゴリーエフ（その翻訳をマールコフが新たに書き直したのです）も亡くなってしまいました。ジュヴェルジェーエフと話していました。ところがドアロ（?!）で出し抜けに、なんだか中国詩の原理について文集に寄稿した自分の論文の報酬を受け取りに来たかのような気がしたのです。わたしはかれの顔にその考えを見て取って、すぐにその場を去りました。それでも、なにしろジュヴェルジェーエフは『ファクトゥーラ』や『イースター島の芸術』〔いずれもマートヴェイの著書、1914年刊〕、それにいくぶんかは『黒人芸術』の出版人でした。『黒人芸術』の出版問題を、マヤコフスキーがしつこく提起したことをあなたはご存じでしょうか（もうマールコフの没後でしたけれども）？

「フィローノフとナグーブニコフの二人のことを覚えています、美術アカデミーでよくかれらの画布の前に立ってはその絵を理解しようとしてつとめたものです。フィローノフはもうこの世にいませんが、ナグーブニコフは存命なのでしょうか、知りたく思います。かれは朋輩（そしてわたしたち共通の仲間友人）のクンス〔?〕と大戦に参加しました。かれらはどうなったのでしょうか？ディーディシコはもと将校で、きちんとした身なりのインテリでした。かれはマールコフに関心を持っていたのです。

「わたしたちは三人で（《青年同盟》の展覧会用に）《リンゴの収穫》というテーマで絵を描きましたが、これをマルコフはその後も続けたようです、その絵がリガの造形芸術美術館にありました、そこに保管されているとは思いませんでした<sup>16)</sup>。展覧会（《青年同盟》で）の後、おかしなことにわたしは自分の絵をもう目にすることはありませんでした、美術アカデミーでは知らないツテで多くのものが紛失したのです。たぶん、そうした絵を描いた本人たちが自作を高く値踏みしていたのでしょう。ディーディシコの作品のことは知りません。本人のこともそうです。わたしにとっていちばん近い人物はマートヴェイ（マルコフ）でした。かれの没後、わたしはかれの質素な部屋で見つけたメモのたぐいをすべてまとめました。日本へ発つとき、わたしはそれをぜんぶモスクワの歴史博物館中世ロシア手稿部に保管のため置いていきました、手稿部でわたしは学術研究員として働いていたのです（五年間、1917-22年）。帰国すると、わたしはなにも見つけ出せませんでした。大いなる出来事〔スターリン時代の「大粛清」と第二次世界大戦、その後の知識人迫害キャンペーンのことだろう〕が、というよりむしろそれに付随していたことがらが、芸術にとって貴重なこれらのメモをも一掃してしまったのです。

「それでも、マルコフと議論したこと、親しい人間としてかれがわたしと話したことはみな、《こころの記憶》に保存してあります。たくさんのことをわたしも記録しました。とはいえ出版にはいたらないでしょう、几帳面にタイプ打ちで、できあがった論文の体裁にしあがってはいるのですが。でもこれはまた別の話です。とはいえこれこそ、新しい画家に届けなければならない。〈・・・〉」

## 6.

ブブノワは当時「あの輝かしい過去の継承」のため、遠く半世紀前にマートヴェイと議論したことをもとに論文を執筆し、それを雑誌に発表しようと努めていたが、どこにも掲載されるあてがなかった。コジューヴニコワの未発表ブブノワ宛書簡によると、この年の春、コジューヴニコワがハールジェフと会ったとある。「今日電話でニコライ・ハールジェフさんと話しました。この春わたしは雑誌『ソヴェート文学』の用事でかれを訪ね、たまたまあなたのことが話題になったのです。かれの家の壁に

16) 1965年夏にブブノワは、マートヴェイの逝去以来久しぶりにリガを訪問し、ラトビア国立美術館でマートヴェイの絵画作品を目にした。1968年1月にブブノワはリガを再訪し、ラトビア国立美術館で開催されたマートヴェイ生誕九〇年記念の展覧会と会議に参加、マートヴェイが生前に残したメモやノートをもとにまとめた報告「絵画における重さの原理」を読み上げた。Кожневникова И.П. Еще одна история верности и любви. Варвара Бубнова и Владимир Матвей // Волдемар Матвей и «Союз молодежи». С.78-81.

マチューシンやグローの作品が飾られていて、なにかしら内面的な連想がわたしに《協働》したのかもしれませんが。ハールジェフさんはあなたからお手紙を受け取って、とても喜んでいました」(1973年6月25日付け)。

4月17日の最初の手紙でハールジェフが「コジェーヴニコワさんと仕事の用事で会った」とブブノワに述べているのは、おそらくこのときのことを指すものと考えられる。ハールジェフがブブノワに手紙を書くことを思い立ったのも、コジェーヴニコワとブブノワのことを話したのが呼び水になったのだろう。

ちょうどハールジェフがブブノワに最初の手紙を送り、ブブノワがそれを読んで返事を書いた頃、つまり1973年4月22日に、コジェーヴニコワはブブノワの著作出版に興味があるかないかをはかるため、雑誌『ソビエト画家』の編集部(編集長ヴラジーミル・ラブシーンと編集員ヴラジーミル・ブローツキー)を訪ねたことをブブノワに書面で知らせている。「かれらはあなたの著作に関心を持ち、次のような体裁であなたについての本を出すことは可能だと言いました。芸術家ワルワラ・ブブノワ。1. 序論。2. B. ブブノワ, 自伝的メモ。芸術をめぐる考察。3. 挿絵。4. 主要著作一覧」<sup>17)</sup>。

⑤ 1973年6月13日付け、ハールジェフのブブノワ宛書簡

「親愛なる、深く敬愛するワルワラ・ドミートリエヴナ、  
「すばらしいお手紙、気配りと信頼をいただき、ありがとうございます。共通のコトバで話すこと、真の対談者の声を耳にすることは、たとえ海や山河の距てがあろうと仕合わせなことです。あなたが歴史博物館に残されたお仕事の運命を聞いて、たいへんかなしく思いました。むろん、いまや世代ごとに限りなく“学”のなくなりつつある研究員たちに訴えたところで無駄でしょう。おそらく、あなたの資料は別の保管場所に移されたのではないのでしょうか。でも、どうしてそれがわかるでしょう。残念ながら偶然に任せるしかありません。」

ブブノワは来日にあたって、モスクワの歴史博物館中世ロシア手稿部に、マートヴェイの残したメモやノートばかりでなく、写本のミニアチュールについて論じた自分の原稿も残していった。現在も歴史博物館のどこかに保管されていると思われるが、そのアーカイヴはただでさえ迷路のようであるうえに、ちょうどブブノワが働いていた1917年から22年の文書は時代の混沌をそのままに保存されているため、どこにあるのか館員でもわからないのが実情だ。2018年9月10日と13日に、私は歴史博物

17) Уроки постижения. С.402-403. 引用箇所には原稿の枚数が記されているが、訳出していない。



館の手稿および古出版物部と出版物情報部を訪ねたが、ブブノワについては、彼女が歴史博物館に所属していた1920年6月に開催された十八世紀写本のミニアチュールをめぐる展覧会についてのメモと目録しか残されていなかった。今後さらなる調査が求められる。手稿および古出版物部長のエレーナ・セレブリャコーワ氏から、1980年代にコジェーヴニコワが歴史博物館へ調査に来ていたとうかがった。いまに残されたコジェーヴニコワの仕事を見るかぎり、彼女も歴史博物館でなにも見いだせなかった様子である。

「ナグーブニコフは、わたしの突き止めたかぎりでは、1921年に亡くなっています。わたしはこのことをロシア美術館の研究員たちに伝えました、かれについては研究員たちもなんの情報もつかんでいないのです。力のおよぶかぎり、忘却の草が茂らないようにはしています。

「ディーディシコですが、次のことがわかっています。1921年にかれはヘルシンキに在住し、翌22年のデュッセルドルフで開催された《国際芸術展覧会》にただ一人フィンランド絵画の代表として参加しました。わたしの手元に《甲板で》（水彩）というかれの小さな作品があります、1913年の《青年同盟》展覧会で展示されたものです。これはアフマートワがわたしに贈ってくれたものです。

「ジェヴェルジェーエフをめぐるあなたの《肖像》は、正確でもあり公正でもありません。わたしはかれと知り合いました（プーニンの紹介で）。むろんかれはマルコフの本や文集《青年同盟》を出版しましたが、かりにかれがジェヴェルジェーエフでなかったとしたら、三倍は多く出版しえたでしょう [この箇所、ブブノワは赤ペンで疑問符？を書き入れている]。《たまたまそこにいただけ》の人物です。かれの芸術パトロンぶりも流行に乗っただけで、ポリャコーフやマーモントフ、リャブシンスキー [二〇世紀ロシア・モダニズム運動のパトロンとなった実業家たち] など、筋金入りの気前の良い《モスクワ人》のまねをただけです。マレーヴィチが、ジェヴェルジェーエフはマチューシンとクルチョーヌィフのオペラ『太陽の征服』の装飾デザインの報酬を払わず、スケッチすら返してよこさなかったと、わたしに語ったことがあります。『黒人芸術』にかれは単に《引きずり込まれた》（もと《出版人》として）だけでしょう。十月革命後は《青年同盟》がジェヴェルジェーエフ唯一の《功績》だったわけで、それで新しい社会でもかれがなんらかの地位を占める権利が与えられたのです。マヤコフスキーと知り合い（トランプ賭博の仲間）だったことも役立ちました。「あなたはグローやマチューシン、マレーヴィチと会いましたか？」<sup>18)</sup>

18) 1972年11月11-12日付けのエヴゲーニー・コフトゥーン宛手紙でブブノワは、マチューシンは知らない、グローは自分の通っていたギムナジウムで自然科学の先生をしていたが、まさか詩

「いまモスクワでは、ヴォルホーンカの美術館〔プーシキン美術館〕に寄贈されたシャガールの自画石版の小展覧会がやられています。同時にトレチャコフ美術館でかれの絵画作品が展示されました(画家の訪ソに関連して)<sup>19)</sup>。シャガールの石版画は素晴らしいですが、《量産》にかなった技巧が神経にさわります。けっきょくラリオーフではない、ラリオーフは自分自身にとどまりながら、毎年新しく《やらない》ことができました。わたしはパリのシャガールよりもラリオーフのほうがずっと偉大なロシアの画家と考えるようになりましたし、いまもそう考えます〈・・・〉<sup>20)</sup>」

「マルコフをめぐるあなたのお言葉ひとつひとつが、わたしには宝物のようです。」

## 7.

ブブノワのハールジエフ宛書簡、最後のものである。モスクワからスフミまで手紙の届くのがだいたい一週間として、前のハールジエフの手紙を受け取ってから約一ヶ月が経過している。その間、これまでのハールジエフ宛手紙よりも、ブブノワの書面のトーンが変わった。最初の手紙のトーンから比べるとハールジエフから距離おいた、皮肉やあてこすりにすら受け取られかねない身振りで手紙を書きはじめている。この間になにかあったのか。

### ⑥ 1973年7月23-24日付け、ブブノワのハールジエフ宛書簡

「親愛なるニコライ・イワーノヴィチ！もう書いたかもしれませんが、あなたの手紙はとても嬉しいのですが、わたしは返事を書くことによってなにか否応なしに世の中のエチケットを遵守しているわけです。忙しいひとたちに対し返事を強いることで迷惑をかけるのではないかと怖れています。[手紙をもらってから] そろそろ一ヶ月ですね、《文書》期限<sup>21)</sup>が過ぎようとしています。お便りすることにいたしましょう。」

---

人だとは知らなかった、あの人のことだろうか？と述べている。ハールジエフにもこの手紙への返信でグローとはごく幼い小学生のときに通りすがりに見たけれど詩人とは知らなかったと述べている(この箇所は本稿では割愛)が、ブブノワの思い違いだろう。Уроки постижения. С.402-403.

19) マルク・シャガールは1973年6月にソ連文化相フルツェワの招待で、妻とモスクワ、レニングラードを訪問した。『シャガール わが回想』朝日新聞出版、1985年、274頁。

20) 以下、プーシキン美術館で開催中だったイタリアの画家ジョルジョ・モランディの展覧会について言及されているが、本稿では割愛する。

21) ソ連時代、行政機関への市民の問い合わせや業務上の手紙に対しては一ヶ月以内に返答しなければならないという決まりがあった。一ヶ月が経過しても返答のない場合は訴えることができた、それを言う。

1970年から78年までにおよぶブブノワとコジェーヴニコワの往復書簡原本（一部が公刊されている）が私の手元にある。それによると、ブブノワは論文の原稿を直接『ソビエト画家』編集部に送る前にコジェーヴニコワに送り（7月1日）、彼女の感想を聞いたほか、いつでもだれか適当な人物（芸術学者ミハイル・アルパートフの名前が言及されている）がいれば見せても構わないと述べている（7月8日）<sup>22)</sup>。

1973年7月22日付けでコジェーヴニコワはブブノワに返信（未発表）し、次のように述べている。「わたしはあなたの論文が気に入ったし、おもしろかったです。《わたしのアカデミー》[ブブノワ青春の回想]はわたしにあなたのお若い頃のことを詳しく教えてくれました、たくさんのことを知りませんでした。〈…〉残念ながらわたしは芸術学者ではないし、あまり頭の良いほうでもないの、あなたの論文のなにが出版社を《おびえさせる》のかはわかりません。それで誰にご論文を見せるべきか考えました。お手紙であなたがアルパートフの名前をおっしゃっていたのでかれと交渉してみることにしましたが、かれは25日までモスクワにおりません。それでハールジェフに電話して（ところで、かれはあなたのお返事を待っていますよ）、《わたしのアカデミー》を読んでもらえないか頼みました。ハールジェフは目を通して、まよわず出版社に渡すのがよろしいと言いました（わたしは残りの論文もぜんぶかれに渡したかったのですが、ハールジェフはお加減が良くなかったのと、わたしもへトへトでしたので、そうはなりませんでしたが）。

ハールジェフのあとコジェーヴニコワは『ソビエト画家』編集担当ブローツキーにブブノワの原稿を持参、好感触は得られたものの、結局なにも実を結ぶことはなかった。

ブブノワのハールジェフ宛書簡のつづき。「あなたはほんとうに熱心にさらに願望を満足させよう、古い朋輩たちの運命を知ろうとなさっています。ナグーブニコフについてまた質問ですが、かれはどのロシア美術館と関係があったのですか、レニングラードの「国立」ロシア美術館のことでしょうか？むろんたいしたことではないのですが、わたしは国立のほうを“少しばかり”自分の美術館とみなすのです、というのもわたしの自画石版をいくつか（十六点？）この美術館が所有しているのです、1961年だったか、モスクワでわたしの個展がやられた際に購入された作品です。それはいまロシア美術館の版画部に所蔵されています、その版画部長だったのが、いまも現職であって欲しいと思いますけれど、コフトゥーンとかいう方で、今でも若くて（相対的なことですが）感じのいい芸術学者でした。でも、およそ芸術学者はわたしを怖がらせません。むろんたいへん文化的なひとたちもおりますけれど……。あなた

22) Уроки постижения. С.410-411.

うかがいたいのですが、あなたは芸術学者ですか？それともほかの《もっと危険の少ない》側面から芸術に近づこうとなさっているのですか？」

現在、ロシア美術館版画部に、ブブノワの石版画は四〇点収蔵されている。2018年9月12日に私も版画部で調査したが、そのほとんどが日本時代の作品だ。ブブノワが「わたしのお気に入りの教え子」と記していた佐々木千世の肖像もある<sup>23)</sup>。ひじょうに状態が良く、インクも色彩も、つい最近に刷られたばかりのように鮮やかなままである。ただ、ブブノワがハールジェフに述べている1961年に、そのうちのどれをロシア美術館が購入したのかまでは調べ上げる余裕がなかった。

「マレーヴィチとわたしはいくぶん変な出会いかたをしました、それはあまりわたしを肯定的に描き出すものではありません。1914年以降、ペテルブルクのことだと思われ、かれの個展が質素な、それでも展覧会の目的にかなった場所でありました。展覧会にわたしは一人で、マレーヴィチも一人でした。芸術を畏れる気持ちのせいでしょうか、わたしは観衆に呈された作品への態度を自分にも他人にもいつも明らかにするよう努めてきましたし、いまでも努めています。でもここでわたしはあまりにも高慢ちきで、マレーヴィチのイデーのまじめさを《理解》しても、かれの《方形のなかの方形》その他がじぶんに及ぼす芸術的な力を《感じ取る》ことができませんでした。わたしはマレーヴィチに絵の技法と事物の具体性が不十分であると説教したようです、ファクトゥーラについて説教したことをよく覚えています。

「いちばん驚かされたのは、マレーヴィチが反駁もせずわたしの意見を聴いたことです、見たところつつましげに、打ちのめされたかのようにでしたが、ひょっとすると心の中でかれを説教するわたしの不遜さをわらっていたのかもしれない。でもかれの顔に笑いはありませんでした、むしろ哀しみ、孤独が見て取れました。そのときにいたほかの観衆をわたしは覚えていません。展覧会で彼と会ってそれからどうなったのかも覚えていません。とはいえ、わたしは自分の不遜さを思い出してわれながらかなしい、恥ずかしくすら思います。もうマレーヴィチも世にないのですね……。かれはいつどこで亡くなったのですか？トレチャコフ美術館の収蔵庫でマレーヴィチの、それこそ真剣で独立独歩の探求の歴史を目にしたことがあるように思います。ここスフミで、マレーヴィチの弟子（1930年代の？）と知り合いになりました。そのひとの息子〔アレクサンドル・ロゾヴォーイ〕は自分をわたしの弟子だと見なしています。どうでしょう、ふしあわせな地方住まいながらも、わたしもなにかしらに順応したわけですね。モスクワが世の中に展示しはじめたものをすべて見たいものだと思います。

---

23) 太田丈太郎「イリーナ・コジェーヴニコワのアーカイヴについて」『海外事情研究』第45巻、26-28頁。

スフミでシャガールは本のなかでしか、それも喜ばしくもフランスの書籍に出くわしたときでしか見られない。〈…〉

「マールコフとわたしが近しかったのは、一緒に卒業したアカデミーのひじょうに短い期間でした。1907年から14年のことです。絵画芸術とはなんなのか、最初はかれに学びました、それからいっしょに仕事をして考察をかさねました。わたしはかれが新しい、たいへんな仕事をしていると考えていました。マールコフの亡くなったとき、かれがわたしと考へ話していたことを保存し、コトバで伝えなければならないと決心しました。

「とはいえそれができたのはソ連帰国後の、ようやく1960年以降のことでした。書き終えて、出版しようと思いました。しかしわたしは、たとえばフルシチョフとは別なように、また芸術学者全般が考えているのと別なように芸術について考えていました。」

とつぜんニキータ・フルシチョフの名前が出てくるので面食らうが、1962年にフルシチョフが社会主義リアリズムになじまない非公式芸術を「ロバの尻尾だ」と攻撃したことをいうばかりでなく、ブブノワにはフルシチョフをめぐってばかばかしい経験があった。ブブノワの書いた「画家の困難な仕事をめぐって」という記事に対し、1963年6月に『文学新聞』が掲載拒絶の返事とともに、次のような文書を送ってきたのだ。「フルシチョフの演説を貴方も注意深くお読みになったものと拝察しますが、そのなかで画家にとって唯一の滋養となるのは国民の生活でなければならない、というくだりがあります。ですから、《世界の芸術を学ぶことは画家には最高の学校にも滋養にもなるはずだ》などという貴方の御高説は正しくありません<sup>24)</sup>。ハールジェフに手紙を書きながら、自分の（ということはマートヴェイの）著作の掲載が拒絶され続けてきたさまざまの経緯が思い出されて、ブブノワの内面にやりきれなさが生々しく追体験されたのだろう。

「当初ミハイル・アルパートフが出版の手助けをしてくれそうでしたが、うまくいきませんでした。つぎにトヴァルドフスキーが『ノーヴィ・ミール』に掲載しようとしたが、やはりだめでした。かれはまもなく亡くなりました。エフィーム・ドロシ [作家] も頼りになりませんでした、なぜならやはりまもなく亡くなったからです。ここでわたしが記しているのは、マールコフの考えとわたしの文章を評価してくれたビッグネームばかりです。日本芸術についてのわたしの論文が『装飾芸術』1969年

24) *Кожевникова И.П.* Еще одна история верности и любви. Варвара Бубнова и Владимир Матвей // *Волдемар Матвей и «Союз молодежи»*. С.82.

6月号に掲載されただけです。

「最初のわたしの書いたもの（四論文）はマルコフの考えとコトバを祖述したものです。かれの思い出に罪を作ってはいけなそうと思ってかれの考えを述べただけです。それから書かれてあったものだけですが、かれの計画を思い出して、それをもとに、ヨーロッパ、アジア（日本）、アフリカなど世界の芸術ですでに収集してあったものをいつも頼りにして〔記事を〕組み立てはじめたのです。でもみなタイプ打ち原稿のままです。

「マルコフをめぐるわたしの言葉ひとつひとつがあなたにとって宝物のようだ、とあなたは書いていらっしゃる。わたしに言いたいことはたくさんある、むろんそれでも不十分です。そこへ老年と、うとましい生活の転変、病気がしのびよってくる。「マルコフ（マートヴェイ）を記念する会議、上述の芸術学者コフトゥーンが開催したのですが、そこで読んでもらうために書いた回想がありますけれど、わたしは参加して自分で読み上げることができませんでした<sup>25)</sup>。

「七－八本の論文は純理論的なものです。若い画家たちはほめてくれ、理解してくれますが、芸術学者はほめてくれませんが、だから芸術学者やその機関との交際からなにもものも期待していません。補足しておかなければなりません、理解をわたしは精密科学に携わっている物理学者や数学者、医療心理学者、それこそアリストテレスやマルクスにすら見いだすことができます（こんなこと、誰も書いていないですけど）。「どうしてわたしがマルコフについて、ほんの数言で語ることができましよう！「他方あなたはペンのひとです、でしたらよく耳を澄まして聞いてください！くれぐれもゆがめて受け取らないでください。正確に記述し、うそいつわりなく、印刷される当人にとって明快に話さないといけません。」

## 8.

ブブノワの返信はハールジェフを傷つけた。ブブノワが自分の著作（マートヴェイの考えを敷衍した論文）について述べながらも、ブブノワの本の出版が検討中であった『ソビエト画家』出版部について、ブブノワが一言も述べていないからである。

25) ブブノワのマートヴェイをめぐる回想のこと。1966年にコフトゥーンはレニングラードでマートヴェイを記念する催しを企画し、スフミのブブノワにも出席してマートヴェイの回想を報告するよう依頼したが、ブブノワは病気で行かれなくなった。*Кожевникова И.П. Еще одна история верности и любви. Варвара Бубнова и Владимир Матвей // Волдемар Матвей и «Союз молодежи». С.78-81; Бубнова В.Д. Последние годы жизни и работы В.И. Матвея // Уроки постижения. С.63-78.* 回想や理論的論文も含めてブブノワの著作は、1994年にコジェーヴニコワが編纂したブブノワの回想・論文・書簡集『ものをとらえる修練 *Уроки постижения*』で、初めて一つにまとめて刊行された。

書面を見るかぎり、ブブノワはハールジェフを「芸術学者」の一員とみなし、警戒したようである。そこへ「芸術学者やその機関」、専門誌や出版社、美術館のたぐいが彼女の著作をしかるべく評価せず、いつまでもおおよげにできないことも手伝って、著作掲載の不首尾をめぐる経緯が手紙を書きながらさまざまに思い起こされたのだろう、ハールジェフへの書面にもつい苛立ちを抑えきれなかったものと見える。

とはいえ、ハールジェフ擁護のために付け加えておくと、もとより雑誌『ソビエト画家』にはハールジェフが関わっていた。じつはブブノワの本を出版することも、次の返信に見えるように、そもそもはハールジェフがもくろんだのであった。にもかかわらずブブノワが、マールコフのことを書面で頻繁に口にしながら、なぜハールジェフに自著の出版についてハッキリとしたことを述べていないのかが奇妙である。

⑦ 1973年7月30日付け、ハールジェフのブブノワ宛書簡

「あなたの手紙はいくぶんわたしをかなしませました。コジューヴニコワさんが『ソビエト画家』出版部にかけ合いに出ていることが一言も述べられていないからです、あなたのご本の出版契約が結ばれる可能性が大きいにもかかわらず。それに出版をもくろんだのはそもそもわたしで、コジューヴニコワさんには〔出版部で〕わたしの名前を出してくださってもかまわない、と申し上げました。なぜなら『ソビエト画家』出版部では、わたしの意見を重くみるからです。

「いいでしょう、これに拘泥することはいたしません、たぶんコジューヴニコワさんが状況すべてをあなたに知らせる必要を認めなかったのかもしれませんが。こんなことには前から慣れていますので驚きません。

「ナグーブニコフの件、ロシア美術館にかれはなんの関係もありません。

「1960年代初めに美術館収蔵物の整理でナグーブニコフが除籍対象となり、わたしが介入してなんとかその唯一の作品（《ジブシー女》）を破滅から救ったのです。当時ロシア美術館にはだれ一人この芸術家のことを知っている研究員がいなかったのです。わたしがかれらに説明しました。かれの亡くなった日付は私が調査して初めてわかりました。こういう《エジプトの夜》の闇を追い散らすのは容易なことではありません。『マレーヴィチについてのお知らせ、いささか正確さに欠けるようです。かれの最初の個展は1920年モスクワでのことで、それもマレーヴィチはその場にいませんでした。あなたはどこか別の展覧会でかれと出会ったのでしょうか。あなたのおっしゃったことをマレーヴィチが傾聴したとの由、わたしは驚きません。かれは他人の言うことに耳を傾け、意見を尊重できるひとでした。ひじょうに《間口の広い》人間でした。『かれの方形が及ぼす芸術的な力のことですが、それがきわめて有効だったのはマレーヴィチ直接の弟子たちだけの話で、ヘマな追随者（オリガ・ヴァザーノワはのぞく）にはかかわりありません。

「ロートチェンコ、クリューン、ステパーノワなどのシュプレマ構成主義はひどいものです。わたしの見たてでは、まったく取るに足らない画家たちです。

「ときに、スフミに住んでいるというそのマレーヴィチの弟子（あなたのお弟子さんの父親）は誰ですか？」

ニコライ・ロゾヴォーイである。その息子のアレクサンドル・ロゾヴォーイ氏は現役の画家で、ブブノワのスフミ時代の弟子に当たる。スフミの個展で観たブブノワの絵が気に入ったので本人に会いに行くと、なにかわたしがあなたにお手伝いができると思うのであれば、またいらっしゃいと言われたのが出会った最初だったという<sup>26)</sup>。

モスクワの「インフク」、芸術文化研究所でブブノワが懇意にしていたのは、ほかでもないハールジェフの言う「まったくとるにたらない画家たち」、ロートチェンコとステパーノワだった。

\*

けっきょく、ハールジェフとブブノワの交際はこれで断ち切れてしまった。ハールジェフには不遇とはいえ貴重きわまりないアーカイヴを手元に秘蔵するロシア・アヴァンギャルド芸術研究の第一人者としての自負があったし、ブブノワには芸術の前衛を「登場人物の一人」としてリアルタイムで生き抜いた、理論面でも実際面でもアヴァンギャルド運動の重要なリーダーの一人だったマートヴェイのパートナーだったという自負があった。ものを作ることもせず、データや本、文書しか知らない「芸術学者」になにがわかるものか。

書面では伝わらない細かい人間関係の機微、出版社との交渉ばかりでなく生身の人間どうしの複雑な事情がじっさいには影響していたのだろうと思われる。しかもブブノワは中央からとおいスフミにおり、モスクワのことはみなコジューヴニコワにまかせきりだった。そのうえ八十七歳という高齢だった。

ところで、コジューヴニコワが1994年に出したブブノワの回想・論文・書簡集にはハールジェフの名前がどこにも見られない。上に紹介したとおり、1973年4-7月のコジューヴニコワのブブノワ宛書簡原本には、私がおおまかに見たかぎりでは二度ほどハールジェフの名前が言及されている。それは回想・論文・書簡集に収録されていない。おそらく前年の1993年にハールジェフがオランダへ移住し、所蔵していた

---

26) アレクサンドル・ロゾヴォーイ氏と私との談話より。2017年9月23日、モスクワのキエフ駅近く、クトゥーフ通り沿いにある氏の自宅とアトリエで。氏は、マートヴェイが生前追究していた時代と民族を超えて通用する絵画一般の原理をいまに受け継ぐ画家である。2018年9月7日と17日に氏と再会したが、その原理をパソコンで客観的に計測できるソフト開発の夢を氏は私に語った。



アーカイヴをめぐる一大スキャンダルが持ちあがったことに関係があるのだろう。

「あなたが芸術学者でなくて、わたしはほんとうに嬉しい！ こういう手合いは絵画のことをなんにもわかっていないし、ただのデータと実地の芸術的経験に裏打ちされてもいない芸術をめぐる他人の考察を知っているだけなのです」<sup>27)</sup>。1973年7月29日、コジェーヴニコワにブブノワはこう書き送っているが、間接的にハールジェフのことが念頭に置かれているのかもしれない。「青年同盟」やマートヴェイのことなど、ブブノワにとって若き日のいちばん「痛い箇所」を突いてきたのがハールジェフだった。土足で踏み込んできて、勝手に解釈されてたまるものか、という思いがあったのだろう。

反面、ハールジェフの立場に立つなら、ひとの記憶というものは当てにならない。ひとの回想は歳月のために歪められ、都合のよい「きれいな」ストーリーに仕立てあげられてしまう、という思いを禁じ得なかったのではないか。だからこそアーカイヴによる精緻で実証的な裏付けが不可欠なのだ。ロシア・アヴァンギャルド芸術の実際と生成史をめぐる未刊行アーカイヴを必死に守ってきた第一人者からすれば、ブブノワとのエピソードも「回想を信じるな」<sup>28)</sup>という自己の信条を裏付ける結果に終わった、ということだろうか。

PDF ファイルでは、文書はなにも語りかけてこない。ハールジェフのアーカイヴ現物が全面公開される日を待つばかりである。

27) Уроки постижения. С.411.

28) 鳴海完造が若き日のハールジェフをアフマトワ宅で見かけたことは記したが、ロシア・アヴァンギャルド運動の日本人研究者で唯一、晩年のハールジェフと数回にわたって対談したのは、亀山郁夫氏である。氏のロシア滞在をめぐる回想録『あまりにロシア的な。』（青土社、1999年）にその貴重なハールジェフとの対談の記憶が随所で述べられているが、残念ながら叙述が情緒的にすぎ、それもハールジェフの弟子ルドリフ・ドゥガーノフのフィルターを経たハールジェフが写し取られているため、具体的にマンデリシタムやフレーブニコフについて、ロシア・アヴァンギャルド芸術の遺産について、なによりハールジェフが手元に保存していた貴重きわまりないアーカイヴについて、ハールジェフが氏に何を語ったのかがまったくわからない。唯一ハールジェフが「回想を信じるな」と氏に述べたことがいちばんにこころに残ったという。ハールジェフとドゥガーノフとの複雑な経緯についてはここに述べない。Дуганов Р.В. Из воспоминаний о Н.И.Х.// Поэзия и живопись. Сборник трудов памяти Н.И. Харджиева. М., 2018. С.42.

## Nikolai I. Khardzhiev's unpublished letters to Varvara D. Bubnova

Jotaro OHTA

Nikolai I. Khardzhiev (1903-1996) is famous for his collection of works, manuscripts and letters by Russian Avantgarde artists. The whole Khardzhiev archive, which was divided between Moscow and Amsterdam over 20 years, has been united, located now in Moscow at the Russian State Archive of Literature and Art (RGALI). It is, however, closed to public access until November 2019.

In October 2015 I discovered four of Khardzhiev unpublished original letters (April-July, 1973) to Varvara D. Bubnova (1886-1983) in the archive of the late Irina P. Kozhevnikova (1925-2011), a biographer of the latter. The purpose of the present article is to make these unknown letters available for academic use. Copies of Bubnova's letters (3) to Khardzhiev were kindly offered to me by Mr. Andrei Ustinov, a specialist on the Russian Avantgarde movement in San Francisco, who had visited the Stedelijk Museum Amsterdam and got there the PDF files of Khardzhiev's archive.

When Khardzhiev happened to meet Kozhevnikova at his apartment in April 1973, he seemed to start thinking of writing letters to Bubnova, with whom Kozhevnikova had been keeping a close contact. He then had just written articles on the group «Союз молодежи» (“Union of youth”), one of the leading avantgarde artists' associations, to which Bubnova had belonged under the guide of its leader and her first husband, Voldemar I. Matvei (1877-1914). Bubnova asked Khardzhiev about her previous colleagues of the group.

Their exchange of letters seemed to have started joyfully to both, but it lasted only three months. It seems to have been painful for Bubnova (she was 87 years old at the time) to remember her days of youth in Academy of arts – they were tightly tangled with memories of her late dearest partner Matvei, his words and works, on which she had been trying to publish articles in Soviet Union for many years in vain. Consequently she had started disbelieving all the art critics and publication houses and could not completely trust Khardzhiev, who was actually planning to help Bubnova's book to be published by «Советский художник» (“Soviet artist”).

Bubnova wanted to meet Khardzhiev personally, but she lived in Sukhumi, remote from Moscow. Khardzhiev, too, could not leave Moscow due to the plan of Khlebnikov's work collection. Their epistolary interaction was brief, but their letters are full of details and insights, which are essential to those who studies history of Russian Avantgarde movement.